

オールドノーマルと守破離

濱野 高行*

新型コロナウイルス感染症のパンデミックについて、以下、7月13日のロイター通信から引用する。「[世界保健機関（WHO）の] テドロス事務局長は、『あまりにも多くの国が間違った方向に進んでいる』と懸念を表明。『予見可能な将来においてオールドノーマルに戻ることはない。多くの懸念が存在する』とし、『基本的なことが守られなければ、パンデミックは悪化の一途をたどる』と警鐘を鳴らした」さて、ここでのオールドノーマルとはどういう意味であろうか？ 辞書的には、「これまでの標準」ということであり、この文脈上ではたとえばマスクをせずに外出をするなどということになろう。しかし、そもそも WHO は健康な人が着用しても感染を予防できる根拠がないとしてマスク着用を推奨していなかったにもかかわらず、平然と6月5日にこの指針を大幅に変更した。間違った方向に誘導したのは、WHO では？ という議論はあえてここではしない。

実際、新型コロナウイルス感染症によって、多くのオールドノーマルが消え失せた。地方から短時間会議のために東京まで行き、また当日のうちに急いで地元に戻ってくるなどという、江戸時代の「参勤交代」のような行事が半年前まではまったく普通のことであった。しかし現在では、Web 会議にとって代わられて、新幹線はガラガラである。ほとんどの製薬会社主導の講演会は web-based のものに置き換えられ、たまにある座談会においても透明なアクリル板のシールドで隣と仕切られるようになった。私も雇っ

* 名古屋市立大学大学院医学研究科腎臓内科

たばかりの秘書の顔を全部見たことは未だにない。選考面接のときから常時マスクをつけているからだ。このコロナ騒動によって、いろいろなことが不要であったことを強く感じるようになった。「そもそも印鑑を押すために会社に行くなんておかしいんじゃないの？ 電子署名を増やそうよ」「なんで、安くない交通費を払い、わざわざ時間をかけてまで遠隔地を訪れ集合会議をする必要があるの？」確かに、オールドノーマルはアフターコロナの時代に消え失せ、新しい産業が多く生まれることになろう。いや、産業構造を変えないと世界はやっていけない。では、医療の世界はどうか？ 電話診療は症状が落ち着いている患者には確かに悪くない。オンライン診療で事足りる患者も意外に多いだろう。

しかし、本当にオールドノーマルを駆逐するのは、どんどん上市される新薬と雨後の筍のように出版される臨床研究である。最近の新薬はエリスロポエチン製剤を過去のものにする可能性もある。一昔前までは、鉄をできるだけ使わないのが正しいと信じられてきたが、鉄欠乏が脳梗塞のリスクになることや、PIVOTAL 研究などの結果が公表され、オールドノーマルに固執したいなら、だれもが納得できるエビデンスが必要だ。ガイドラインも今後変わっていくだろう。経験のある上司に育ててもらった医師は、いつまでも知識を忠実に受け継ぐ「守」の姿勢でいるとアツという間にロートル化する。若さのあるうちに「破」の精神で教わったことを疑い、「離」の精神で新しいエビデンスを作り出さないとニューノーマルの世界に羽ばたけない。

若い医師たちよ、さあ俺らの世代を超えてみろ。俺らはいつでも、踏みつけられる準備はできているぞ。だって、俺らもそうしてきたんだからな。